

## 幼稚園・保育所と小学校の連携の課題について

著者	後藤 永子, 鹿渡 よしみ
雑誌名	東邦学誌
巻	39
号	2
ページ	31-48
発行年	2010-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1532/00000224/">http://id.nii.ac.jp/1532/00000224/</a>

## 幼稚園・保育所と小学校の連携の課題について

後 藤 永 子  
鹿 渡 よしみ

### 目 次

1. はじめに
2. 研究目的
3. 研究方法
  - (1) 調査対象
  - (2) 調査方法
  - (3) 調査時期
  - (4) 調査内容
  - (5) 質問項目
    - 調査①ー（小学校用）
    - 調査①ー（幼稚園・保育所用）
  - (6) 倫理的配慮
4. 結果
  - (1) 保育・教育現場の連携に対する意見や提案などについて
    - 1) 《連携に対する具体的な意見》小学校側から
    - 2) 《連携に対する具体的な意見》幼稚園側から
    - 3) 《連携に対する具体的な意見》保育所側から
    - 4) 《連携に対する具体的な提案》幼稚園・保育所・小学校から
  - (2) 調査内容：①幼・保・小の連携の実態と意識調査について
    - 1) 連携の実態
    - 2) 連携に対する意識
    - 3) 現在の連携内容
    - 4) 連携での問題点
    - 5) 望ましい連携の回数
    - 6) 望ましい連携の方法
    - 7) 連携の望ましい時期
    - 8) 連携で欲しい情報の対象
    - 9) 連携の規模
    - 10) 連携における具体的な情報（指導要録には記されない情報）
  - (3) 調査内容：②幼・保・小の立場から、幼児期に重要と思われる体験の調査
    - 1) 『健康』の領域に関する事項
    - 2) 『人間関係』の領域に関する事項
    - 3) 『環境』の領域に関する事項
    - 4) 『言葉』の領域に関する事項
    - 5) 『表現』の領域に関する事項
  - (4) アンケート回答者について
    - 1) 男女比
    - 2) 勤務年数

3) 移行期の1年生あるいは5歳児を担当した経験の有無

## 5. 考察

1) 連携の必要性

2) 今回のアンケートの回答者について

3) 今回の調査で、読み取れたこと

## 6. おわりに

## 1. はじめに

未来を担う子どもたちのより良い学び・育ちを期待するには、その一人ひとりの子どもの成長・発達過程を把握しておくことが重要である。

小学校に入学するという子どもの環境移行に伴う適応差については「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「小学校学習指導要領」という制度と内容の違いに由来する部分もある。例えば、小学校では学年別の到達目標が明確に示されるが、幼稚園・保育所ではいずれも到達目標ではない。この異なりは、幼児期は月齢による育ちの違いが大きく、成長・発達も一様ではない故、到達目標として示せないことから生じている。このような成長・発達に由来する内容の異なりは当然のことであるが、この異なりを繋げる連携の在り方を研究のテーマとした。

また、遊びを主とした生活から学びを主とした教科学習への移行期の子どもにとって、幼稚園・保育所・小学校の連携が大切なことは当然ながら、学年が進んでからも、その一人ひとりの子どもの幼児期からの成長・発達過程を把握しておくことが有効かつ重要なことも明白である。

未来を担う子どもたちのより良い学び・育ちを期待して、現在の保育・教育環境における幼児期から学童期の現場の連携の実態、保育者と教師たちの意識を調査し、考察を試みた。

## 2. 研究目的

移行期の子どもにとって、幼稚園・保育所・小学校の連携が大切であることと、学年が進んでからも幼児期からの成長・発達過程を把握しておくことは、有効かつ重要である。より良い、子どもの連続的な学び・育ちを援助するにはどうしたらよいのか、現在の保育・教育環境を調査し、これからの時代を担う子どもとその親たちへ、何らかの援助の施策について提案することを目的とする。

## 3. 研究方法

(1) 調査対象 小学校教諭＝81人 幼稚園教諭＝57人 保育士＝109人

(2) 調査方法 質問紙法

(3) 調査時期 2008年8月～10月

(4) 調査内容 ①幼稚園・保育所・小学校の連携の実態と意識調査

②幼稚園・保育所・小学校の立場から、幼児期に重要と思われる体験の調査

(5) 質問項目

調査①—（小学校用）

■いずれかを丸で囲んでください。

1. 回答者の性別（男性・女性）
2. 勤務先での現在の立場（管理職・クラス担任・養護教諭・その他）
3. 勤務年数（3年以内・10年以内・20年以内・30年以内・31年以上）
4. 1年生を担当した経験（ある 回・ない）

【質問】

I. 幼保・小の連携の必要性

- ①非常に重要 ②重要 ③どちらとも言えない ④あまり意味がない ⑤不要

II. 現在行われている連携内容についてお答え下さい。

- ①大変満足 ②満足 ③どちらともいえない ④不満 ⑤大いに問題あり

－ご意見をお願いいたします－

III. 幼保・小の連携にあたり、望ましいと考えられる時期（複数記入可）

- ①就学児検診時 ②入学直前 ③入学直後 ④運動会などの交流・行事訪問

IV. 望ましいと考えられる連携の回数

- ①頻繁に ②必要な時だけ ③1回 ④書類があれば充分 ⑤不要

V. 望ましい連携の方法（複数記入可）

- ①行事交流 ②教員同士の訪問・話し合い ③書類 ④電話 ⑤問題時のみ連絡

VI. 連携で欲しい情報の対象（全員のもの・気になる子どもだけ・気になる親子）

VII. 連携を行うにあたり問題となること（複数記入可）

- ①時間がとれない ②面倒である ③幼児期からの発育履歴は必要がない  
④その他（ ）

VIII. 連携の規模として、個別に幼小・保小など、または地域の幼保・小全体の連携会などがあったほうが  
よいか。

- ①個別のみ ②小学校区全体 ③個別と全体の両方

IX. 文部科学省管轄である幼稚園からの書類について

- ①非常に重要 ②現在のもので良い ③不要

X. 厚生労働省管轄である保育園からの書類について

- ①非常に重要 ②現在のもので良い ③不要

XI. 幼保・小の連携で具体的にほしい情報（指導要録等には記入できない情報）

i. 各園の方針と保育形態や行事など

①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

ii. 子どもの個性や人間関係の様子がわかるもの（家庭環境・親子関係や友人）

①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

iii. “気になる子ども”について問題となる具体的な事例や情報

①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

iv. 小学校の教科に合わせたスキルの情報（国語：言葉・文字、体育、音楽：歌）

①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

XII. もし、1年生を担当することになった場合、幼稚園・保育所時代に習得してきて欲しい、幼児期に重要であると思われる体験に◎○△をつけて下さい。

- ( ) 外で元気いっぱい遊ぶことができ、丈夫な体をつくる。
- ( ) 相手のことを思いやることができ、友達と仲良く遊ぶことができる。
- ( ) 集団のルールを守り、協調的な態度がとれる。
- ( ) 掃除や当番の仕事を、最後までやり遂げることができる。
- ( ) ゲームで負けたり辛かったりしたときに、我慢することができる。
- ( ) 好き・嫌いなど、自分の意思をはっきりと伝えることができる。
- ( ) 担任や友達の話をしっかり聞くことができる。
- ( ) 好きなことにじっくりと取り組み、自信を持って行動することができる。
- ( ) 自然・社会現象に興味関心を持ち、本物にふれる機会を多く持つ。
- ( ) 教育番組や絵本などを、親と一緒にみる機会を多く持つ。
- ( ) 自分の名前や数字を書いたり計算したりすることができる。
- ( ) 巧緻性（手先の器用さ）と自分の身の回りの始末、後片付けの習慣がある。
- ( ) スキンシップの経験が豊かで、自分が好かれている実感と自信を持っている。
- ( ) 食事を自分でうまく食べることができる。（所要時間・好き嫌いや量など）
- ( ) 挨拶・早寝早起きなど日々の生活のリズムがしっかりと確立できている。

調査①—（幼稚園・保育所用）

■いずれかを丸で囲んでください。

1. 回答者の性別（男性・女性）
2. 勤務先での現在の立場（管理職・主任・教諭／保育士）
3. 勤務年数（3年以内・10年以内・20年以内・30年以内・31年以上）
4. 5歳児を担当した経験（ある 回・ない）

【質問】

I. 幼保・小の連携の必要性

①非常に重要 ②重要 ③どちらとも言えない ④あまり意味がない ⑤不要

II. 現在行われている連携内容についてお答え下さい。

- ①大変満足 ②満足 ③どちらともいえない ④不満 ⑤大いに問題あり

－ご意見をお願いいたします－

III. 幼保・小の連携にあたり、望ましいと考えられる時期（複数記入可）

- ①就学児検診時 ②入学直前 ③入学直後 ④運動会などの交流・行事訪問

IV. 望ましいと考えられる連携の回数

- ①頻繁に ②必要な時だけ ③1回 ④書類があれば充分 ⑤不要

V. 望ましい連携の方法（複数記入可）

- ①行事交流 ②教員同士の訪問・話し合い ③書類 ④電話 ⑤問題時のみ連絡

VI. 連携で伝えたい情報の対象（全員のもの・気になる子ども・気になる親子）

VII. 連携を行うにあたり問題となること（複数記入可）

- ①時間がとれない ②面倒である ③幼児期からの発育履歴は必要がない  
④その他（ ）

VIII. 連携の規模として、個別に幼小・保小など、または地域の幼保・小全体の連携会などがあったほうが  
よいか。

- ①個別のみ ②小学校区全体 ③個別と全体の両方

IX. 文部科学省管轄である幼稚園からの書類について

- ①非常に重要 ②現在のもので良い ③不要

X. 厚生労働省管轄である保育園からの書類について

- ①非常に重要 ②現在のもので良い ③不要

XI. 幼保・小の連携で具体的に伝えたい情報（指導要録等には記入できない情報）

i. 各園の方針と保育形態や行事など

- ①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

ii. 子どもの個性や人間関係の様子がわかるもの（家庭環境・親子関係や友人）

- ①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

iii. “気になる子ども”について問題となる具体的な事例や情報

- ①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

iv. 小学校の教科に合わせたスキルの情報（国語：言葉・文字、体育、音楽：歌）

①有るとよい ②どちらでも良い ③不要

XII. もし、5歳児を担任することになった場合、幼稚園・保育所時代に習得させておきたい幼児期に重要であると思われる体験に◎○△をつけて下さい。

- ( ) 外で元気いっぱい遊ぶことができ、丈夫な体をつくる。
- ( ) 相手のことを思いやることができ、友達と仲良く遊ぶことができる。
- ( ) 集団のルールを守り、協調的な態度がとれる。
- ( ) 掃除や当番の仕事を、最後までやり遂げることができる。
- ( ) ゲームで負けたり辛かったりしたときに、我慢することができる。
- ( ) 好き・嫌いなど、自分の意思をはっきりと伝えることができる。
- ( ) 担任や友達のことをしっかりと聞くことができる。
- ( ) 好きなことにじっくりと取り組み、自信を持って行動することができる。
- ( ) 自然・社会現象に興味関心を持ち、本物にふれる機会を多く持つ。
- ( ) 教育番組や絵本などを、親と一緒にみる機会を多く持つ。
- ( ) 自分の名前や数字を書いたり計算したりすることができる。
- ( ) 巧緻性（手先の器用さ）と自分の身の回りの始末、後片付けの習慣がある。
- ( ) スキンシップが多く、子どもは自分が好かれている実感と自信を持っている。
- ( ) 食事を自分でうまく食べることができる。（所要時間・好き嫌いや量など）
- ( ) 挨拶・早寝早起きなど日々の生活のリズムがしっかりと確立できている。

(6) 倫理的配慮 本研究の主旨は、書面と口頭にて説明し、結果は本研究以外には用いないこと、回答の有無によって不利益が生じない旨を明記した上で依頼し、回答をもって同意を得た。

## 4. 結果

(1) 保育・教育現場の連携に対する意見や提案などについて

《連携に対する具体的な意見》小学校側から

○幼・小とも多忙すぎて「連携を密にする」までには至れない。時間がなく、発展もあまりない。

○小学校の教師は時間が足らず、連携を希望するが手短かに教師のみで連絡伝達で済ませたいのも本音である。

○幼・保での普段の子どもの様子をもっと見に行く必要があると思うが、時間的には厳しく実現できていない。

○連携は単発ではなく通年で行き、幼・保・小の共通理解がないと意味がない。

○小学校で欲しいと思っている情報が幼・保にうまく伝わっていない。意識・視点の違いか。

○連携では、個人的な情報だけではなく、幼稚園・保育所の指導内容の概要も必要だ。

○小学校では、先生の話を書くことや集団行動がとれることを望むが、園の保育形態により子どもの行動が異なるのも事実である。

○個人情報保護法が連携の邪魔となり、具体的なことが伝わってこない。

○個人情報の関係もあるが、配慮の必要な児童については、せめてクラス分けの前に話し合いが欲しい。

○担任決定をする前に管理職との引き継ぎがされるので、担任にも正確に伝わるように、文書での連絡が欲しい。

○幼・保から「気になる子」と言われている場合は虐待か障害が疑われる場合が多く親も不安を抱えており、親の子育て支援が非常に重要であり、大事にしていきたい事である。

- 子どもは、やるべき時期にやるべきことを経験することが重要であり、日本語もたどたどしい幼・保時代に英語や書道を教えるようなことをして親を刺激しないでほしい。幼児期に重要と思われる体験の大半は、本来は親の仕事であるから、親には正しいフォローをしてあげてほしい。
- 校区内の公立幼・保との交流はあるが、他の私立幼・保との連携がないので困る。
- 私立幼稚園では経営上の配慮からか、園の評判に悪いことは話しながらない傾向がある。
- 幼稚園から送られてくる指導要録はもっと簡単でいいと思う。
- 幼・保からの書類は表面的な現状を改めてくれるのであれば、とても重要だ。
- 就学前に身につけてほしいこととしては ①基本的な生活習慣 ②社会性…みんなと遊ぶ ③感覚機能…触覚・味覚 ④内言語を外言語化する。
- 10までの数の理解と自分の名前の読みや字への興味・関心は必要と考える。

#### 《連携に対する具体的な意見》幼稚園側から

- 併設園であり、定期的に会議の場を持ち、情報の交換ができていたので満足している。
- 小学校の先生が園に来てくださり入学前の子どもの様子（主にクラス編成に関わること）を伝える機会や、入学後には授業参観に行かせて頂き、子どもの様子を懇談する時間も設けて頂いており満足している。
- 行事や慣例でなく、計画性のある連携内容を考えていきたい。
- 行事だけでなく、もっと交流を増やす必要がある。普段の子ども達の交流が大切だと感ずる。
- 連携がシステムとして確立されていると良い。効率的で動きやすいと思う。
- 幼稚園と小学校で、障害児に対する考え方受け止め方の違いを感じる。
- 幼稚園できめ細やかに指導していても、それを生かした学校教育になっていない様な気がする。
- 小学校とは連携があるが、保育所とはない。幼稚園と保育所の連携も欲しい。
- 公立小・中の教員同士は連携を行っているようだ。

#### 《連携に対する具体的な意見》保育所側から

- 幼稚園や小学校と、かかわる機会がない。
- 家庭環境・アレルギーや病気などについては伝えたい。
- 園児は10か所ほどの小学校に入学するので、数が多く連携をとりにくい。
- 幼・保・小懇談会で個々の様子を伝えあう機会はあるが、年に1度だけではとても伝えきれない。しかし、現状を考えると、話し合う時間を多く取るのも難しい。
- 小学校によっては全体会の中で個人情報を提供する場面もあり、問題に思う。
- 小学校側が発育履歴を必要とっていないように感じる。
- 意思疎通の不一致を感じる。保育所サイドの伝えたい旨と、学校側の求めるものとのギャップを感じる。
- 小学校側から園に一度来ていただき、子どもを見てほしいと思う場合もある。
- 話をしたことが生かされていないことがあるため、しっかりと子どもを把握しフォローをお願いしたい。
- 連携によるマイナス面としては、先入観や主観性にとらわれることへの懸念がある。

#### 《連携に対する具体的な提案》幼稚園・保育所・小学校から

- いわゆる“荒れている”学区の小学校側から、幼稚園に対して「まず園の時代に、親の躰けをしておいて欲しい。さらに、子どもには考える力や自主性・社会性をつけて欲しい」との要望があった。それに対して園長は「幼児期が重要だと思われること、さらに時代としてモンスターペアレントの問題も伺える。しかし、大学を出て数年の保育士や教諭では、親の教育などは無理な話である。また、園長の講演会などで話を聞いてほしい親ほど来ないものだ」と答えた。



○幼・保・小の交流は ①参加型に陥る ②日程調整の難しさや連続性への危惧など、物理的制約が大きく、厳しい側面もある。

連携では ①職員間の情報交換 ②お互いの専門性を確認することや共通理解も重要である。従って、これらを幼・保・小の年間計画に盛り込むようにしたり、さらには公立・私立全ての幼・保が同じ書式で情報の記入を義務化したりするなど、連携のシステム化&マニュアル化をするのは如何かなどの具体的な提案が多数あった。

○小学校の「生活科」で園を訪問し、子ども同士の交流を行った。これは子ども同士が互いの成長を確認して楽しめるうえ、双方の教師間では本音のトークタイムが持てて有意義であった。

○地域の幼稚園・保育所に、学区の中学校教師が出向き、園児の保護者に対して講演会を行って成果をあげている。「子どもは小さい頃からしっかりと愛情を注いで育てて下さい。(中学校になってから慌てても遅い!) 子どもにとって、自分が愛されているという自信がもてることが大切である」といった内容である。まさに手を焼く年頃の中学生を相手とする教師の話は、園児を持つ若い親たちの子育て意識に喝をいれるようで、かなりの効果がある。

(2) 調査内容：①幼・保・小の連携の実態と意識調査について

※(表1～13までは幼・保・小の回答者をそれぞれ100として%で表わす)

#### 1) 連携の実態

同じ都道府県内においても地域差がかなり大きい事が分かった。

ある小学校の併設園では「幼稚園教諭は小学校の職員朝礼・会議にも参加している。親睦会も一緒に、幼稚園と小学校の教諭同士の交流は密接である。子ども同士の交流も盛んである。」と記入された。しかし、全調査区域としては、厳しい実態があった。小学校の経験豊富な教諭の回答として「小学校へ幼稚園・保育所から要録などの書類が送られてくることすら知らなかった」という回答が30%もあった。

#### 2) 連携に対する意識

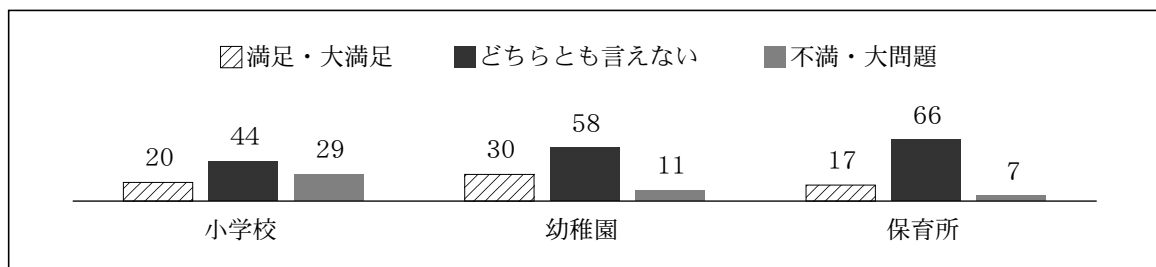
幼・保と小の連携の必要性を「意味がない・不要」という回答が小学校で1%あり、保育所も1%あった。一方、「非常に重要・重要とする」という回答が小学校で91%、幼稚園で97%、保育所で86%あった。

#### 3) 現在の連携内容

小学校の29%が「不満・大問題」と回答し、幼稚園の30%が「満足・大満足」という回答である。また、「どちらとも言えない」という回答が小学校で44%、幼稚園で58%、保育所で66%あり、いずれも半数前後であった。

先の項目の連携に対する意識では連携を重要としたが、現実には厳しいということが伝わってくる結果であった。

表1 現在の連携内容



#### 4) 連携での問題点

「時間がない」という回答が小学校で86%、幼稚園で84%、保育所で90%あった。一方、「面倒だ」という回答が小学校で5%、幼稚園で2%、保育所で2%あった。また、「発育履歴は不要」という回答が小学校で1%、幼稚園で4%、保育所で2%あった。

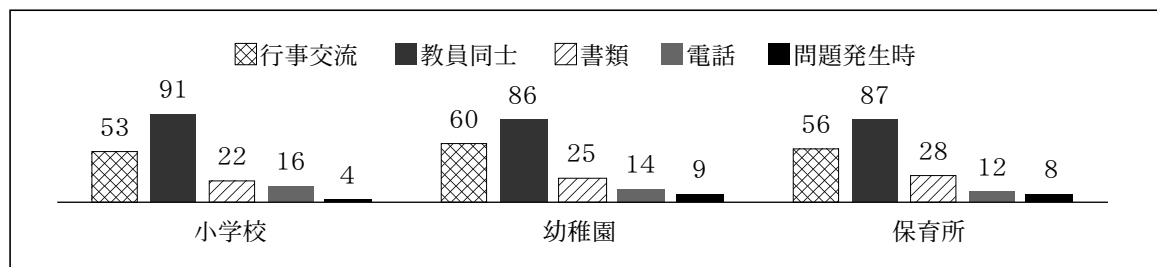
#### 5) 望ましい連携の回数

「必要時に」という回答が小学校で68%、幼稚園で61%、保育所で66%と1番多かった。「頻繁に」は、小学校で23%、幼稚園で32%、保育所で20%と2番目に多く、数字的にも大差はなかった。また、「1回」、「書類のみ」、「不要」という回答は小学校、幼稚園、保育所いずれも0%～7%であった。この設問から、連携は小学校、幼稚園、保育所の何れにとっても「必要」なことであり、各々20%以上が「頻繁に」を希望していることがわかった。

#### 6) 望ましい連携の方法

「保育士・教諭同士の訪問・話し合い」という回答が最も希望が多く、小学校で91%、幼稚園で86%、保育所で87%あった。「行事交流」が2番目に多く、小学校で53%、幼稚園で60%、保育所で56%あった。続いて「書類」、「電話」、「問題が発生した時」という希望順位であった。

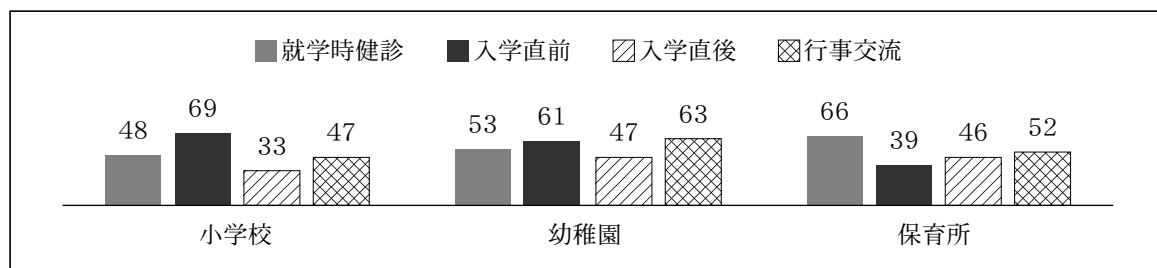
表2 望ましい連携の方法



#### 7) 連携の望ましい時期

小学校は「入学直前」を69%で1番目にあげた。幼稚園は「行事交流」を63%で1番目にあげている。保育所は秋に行う「就学時健診」を66%で1番目にあげた。限られた時間の中での連携として、小学校は「入学直前」の情報が大切であり、幼稚園・保育所は「入学直前」よりも「行事交流」に関心が高い傾向があった。また、「入学直後」は小学校と幼稚園が最も少なく4番目の希望で、保育所も3番目の希望であった。この時期は新学期が始まって忙しく、小学校、幼稚園、保育所ともに問題が起こる以外は連携までのゆとりが無いのが現実のようである。

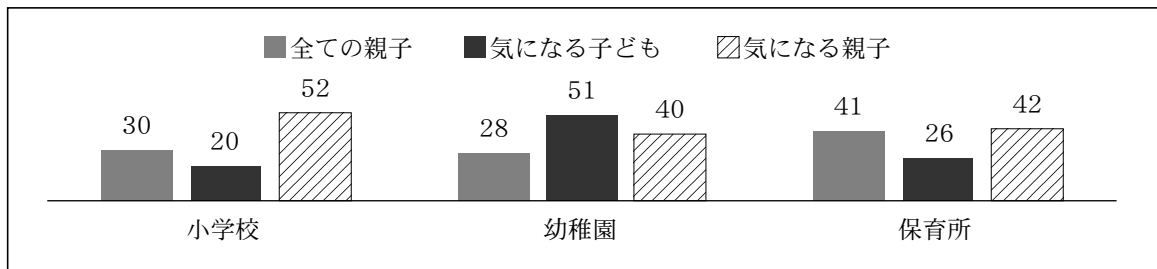
表3 連携の時期



#### 8) 連携で欲しい情報の対象

小学校は「気になる親子」を52%で1番目に、「全ての親子」を30%で2番目に希望した。幼稚園は「気になる子どものみ」を51%で1番目に、「気になる親子」を40%で2番目に希望した。なお、保育所は「気になる親子」を42%で1番目に、「全ての親子」を41%で2番目に希望した。この結果の特色は、小学校と保育所は「気になる親子」を1番目に希望したが、幼稚園は「気になる子どものみ」を、1番目に希望したことである。「気になる子どものみ」は小学校と保育所は3番目に希望しており、興味深い結果である。

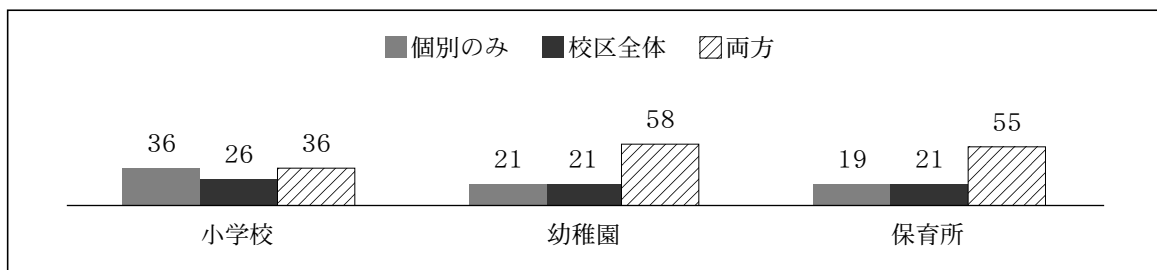
表4 連携で欲しい対象



#### 9) 連携の規模

「個別と校区全体の両方」を、小学校、幼稚園、保育所のいずれもが1番目に希望した。しかし、小学校は「個別のみ」と同じ36%であった。この、小学校の36%は、幼稚園58%、保育所55%といったものよりもかなり低い数値であった。

表5 連携の規模



#### 10) 連携における具体的な情報（指導要録には記されない情報）

「子どもの個性や人間関係の様子（家庭環境・親子関係・友人など）」と「気になる子どもの問題となる具体的事例や情報」は、小学校、幼稚園、保育所ともに88%~98%が必要と感じていた。

「各園の方針と保育形態や行事など」は小学校が58%、幼稚園と保育所の67%が必要と感じていたが、小学校のその数値は幼稚園、保育所よりも10%ほど低かった。

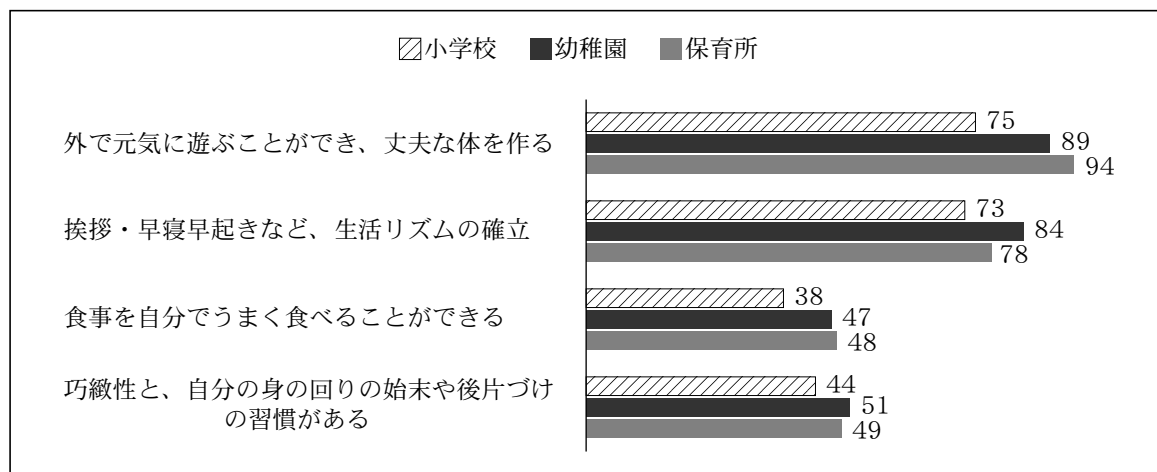
「小学校の教科に合わせたスキルの情報（言葉・文字・体育・歌）は、小学校49%、幼稚園58%、保育所44%が必要と感じていたが、数値的にはかなり低いものであった。また、保育所と幼稚園の数値には14%の開きがみられた。

#### (3) 調査内容：②幼・保・小の立場から、幼児期に重要と思われる体験の調査

5領域の『健康』、『人間関係』、『環境』、『言葉』、『表現』を含んだ合計15の質問に対して、重要度

を◎○△で記入し、回答者の人数を100として、◎のついた数字を%で示した。

表6 健康の領域



1) 『健康の領域』

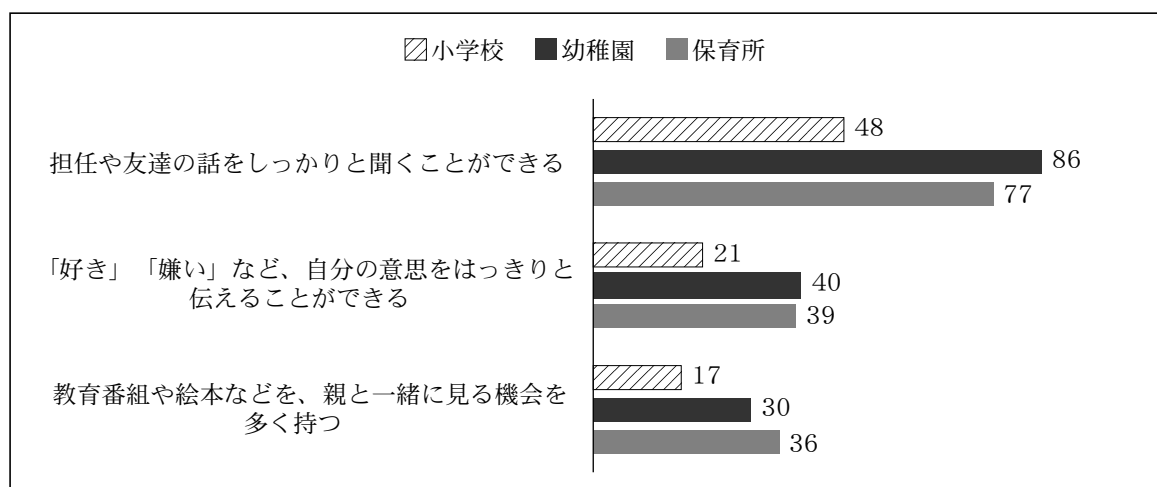
「外で元気に遊ぶことができ、丈夫な体を作る」については、小学校は75%、幼稚園は89%、保育所は94%で何れも幼児期に重要と思われる体験として1番多かった。

「挨拶・早寝早起きなど、生活リズムの確立」についても、小学校は73%で2番目に重要と思われる体験とした。しかし、幼稚園が84%、保育所は78%で重要と思われる体験としては何れも3番目であった。

「食事を自分でうまく食べることができる…所要時間・好き嫌い・量なども含めて」では、小学校は38%で重要と思われる体験の8番目であった。幼稚園が47%、保育所は48%で何れも10番目であった。

「巧緻性（手先の器用さ）と自分の身の回りの始末や後片づけの習慣がある」については、小学校は44%で7番目に重要と思われる体験とした。幼稚園が51%、保育所は49%で何れも9番目に重要と思われる体験であった。

表7 言葉の領域



## 2)『言葉の領域』

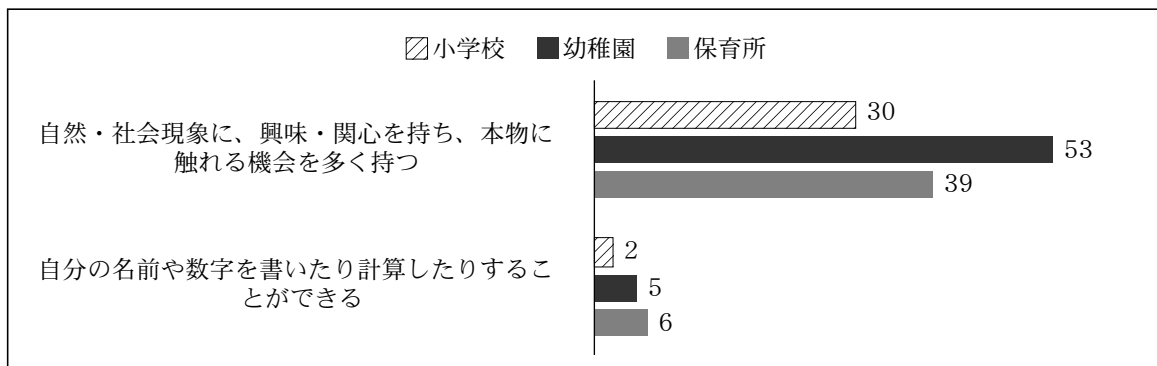
「担任や友達の話をしっかり聞くことができる」については、小学校は48％で幼児期に重要と思われる体験の6番目であった。しかし、幼稚園は86％で2番目に、保育所は77％で4番目に重要と思われる体験だとする結果がでた。

この結果の特徴として、幼稚園が2番目、保育所が4番目に大切なことだとしたのに対し、小学校側の教諭は、この「担任や友達の話をしっかり聞くことができる」ことよりも、『人間関係の領域』の「相手を思いやり友達と仲良く遊ぶこと」を重要なこととして3番目にあげている。

『好き』『嫌い』など、自分の意思をはっきりと伝えることができる』については、小学校が21％で11番目に、幼稚園は40％、保育所が39％で何れも12番目であり、幼児期に重要と思われる体験として、小学校、幼稚園、保育所の考えの差は少なかった。

「教育番組や絵本などを、親と一緒に見る機会を多く持つ」については、小学校が17％で14番目、幼稚園は30％で13番目、保育所が36％で14番目であった。これは『言葉の領域』で大切なところであるが、「絵本などを親と一緒に見る」という文言よりも「教育番組」を先に持ってきたことが結果に影響した可能性もある。

表 8 環境の領域

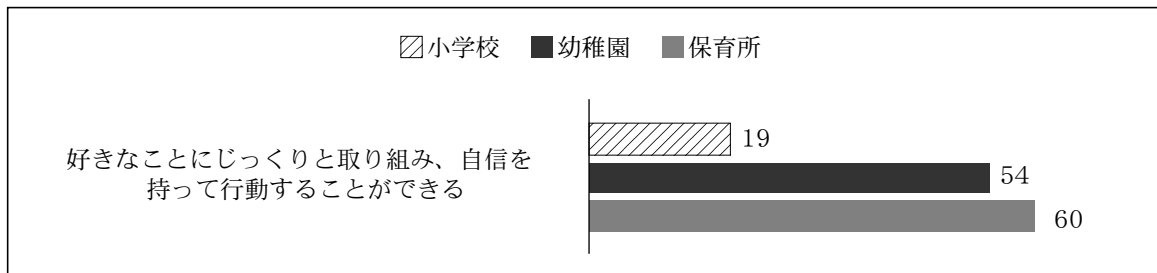


## 3)『環境の領域』

「自然・社会現象に、興味・関心を持ち、本物に触れる機会を多く持つ」については、小学校は30％で幼児期に重要と思われる体験の9番目に、幼稚園は53％で8番目、保育所は39％で12番目であった。

「自分の名前や数字を書いたり計算したりすることができる」については、小学校は2％、幼稚園は5％、保育所は6％で何れも幼児期に重要と思われる体験の15番目であり、最も低い数値となった。これは身近な『環境の領域』というよりも、勉強の先取りと捉えられたり、幼児期はいわゆる「読み書きソロバン」的なことよりも大切な事があると感じられたりした結果のようである。

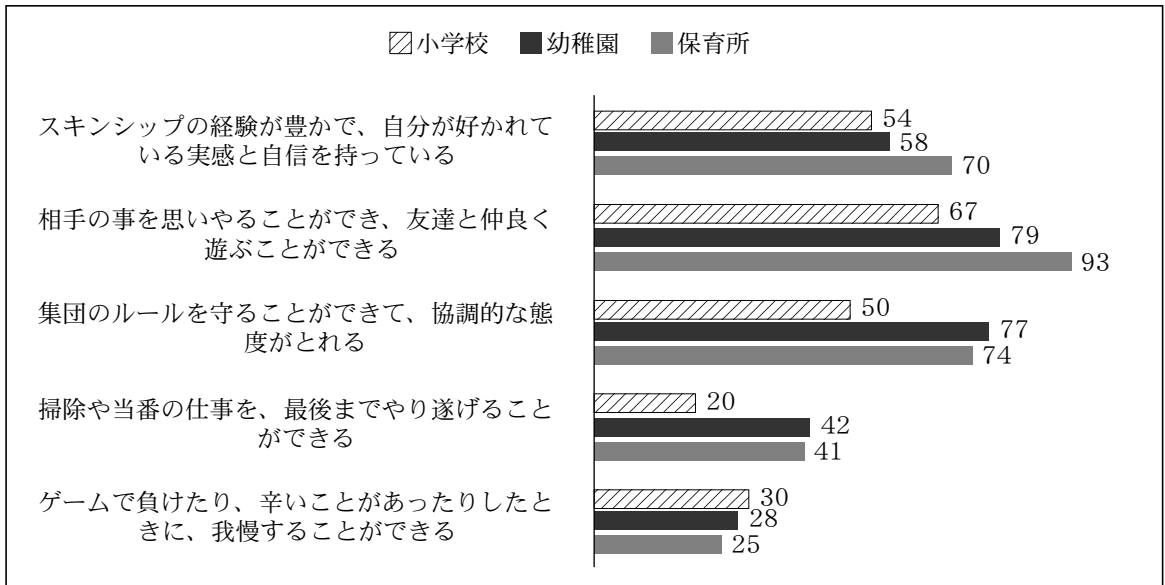
表 9 表現の領域



#### 4)『表現の領域』

「好きなことにじっくりと取り組み、自信を持って行動することができる」については、小学校は19%で13番目、幼稚園は54%で7番目、保育所は60%で8番目であった。この項目は、幼稚園と保育所が同じくらい重要な体験であるという認識であったが、小学校はそれ程重要とは思われなかったことになる。

表10 人間関係の領域



#### 5)『人間関係の領域』

「スキンシップの経験が豊かで、自分が好かれている実感と自信を持っている」については、小学校は54%で4番目に幼児期に重要と思われる体験とした。幼稚園は58%、保育所も70%で6番目であった。この結果から、小学校の教諭は幼稚園や保育所よりも、子ども自身が自分は好かれているという自信を持つことの大切さを重要と感じているようである。

「相手の事を思いやることができ、友達と仲良く遊ぶことができる」については、小学校は67%で3番目に、幼稚園は79%で4番目、保育所は93%で2番目に、幼児期に重要と思われる体験という考えであった。

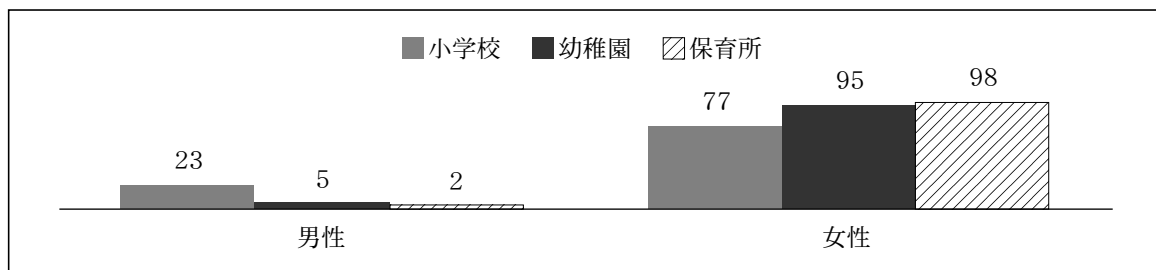
「集団のルールを守ることができて、協調的な態度がとれる」については、小学校が50%、幼稚園が77%、保育所が74%で、いずれも幼児期に重要と思われる体験の5番目に重要だとした。

「掃除や当番の仕事を、最後までやり遂げることができる」については、幼児期に重要と思われる体験として小学校は20%で12番目に、幼稚園が42%、保育所が41%で、何れも11番目であった。

「ゲームで負けたり、辛いことがあったりしたときに我慢することができる」については、小学校は30%で幼児期に重要と思われる体験の9番目であった。幼稚園が28%、保育所が25%で、何れも14番目であった。小学校の方が、幼稚園や保育所よりも我慢することができることを重要とした。

(4) アンケート回答者について

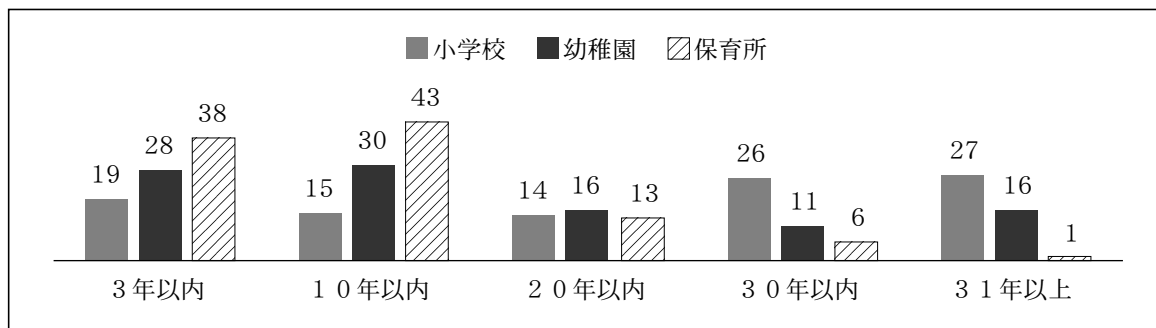
表11 アンケート回答者の男女比



1) 男女比

小学校は男性教諭23%に対して女性教諭77%であった。幼稚園は男性教諭5%に対して女性教諭95%、保育所は男性保育士2%に対して女性保育士98%であった。まだまだ幼稚園、保育所は圧倒的に男性が少ないことが伺える。

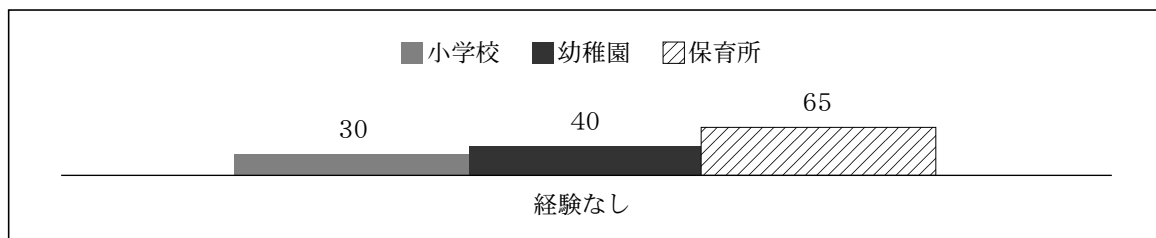
表12 勤務年数



2) 勤務年数

3年以内と10年以内の合計が小学校では34%、幼稚園では58%、保育所では81%であった。また、勤務年数31年以上が小学校は27%、幼稚園では16%、保育所は1%であった。さらに、小学校の場合は20年以内14%、30年以内が26%で、ほぼ各年代が揃っているが、幼稚園、保育所は若い女性教諭や保育士が圧倒的多数で有る。

表13 移行期の担任経験



3) 移行期の1年生あるいは5歳児を担任した経験の有無

移行期の担任の経験が無い教諭は、小学校が30%、幼稚園が40%、保育所が65%であった。幼稚園、保育所に関しては、このアンケートの回答者の半数前後が未経験者であった。



また、経験ありの中では、担任回数が小学校は2、3回、幼稚園は5、6回、保育所が2、3回であった。小学校は70%が2、3回ほど、保育所も35%が2、3回ほど担任の経験があることになる。幼稚園は60%の教諭が5、6回ほどの担任の経験があった。幼稚園の担任経験が多い事は、子どもの在籍期間が小学校や保育所は6年間ほどであるが、幼稚園は基本的には3年間であることも関係するようである。

## 5. 考察

### (1) 連携の必要性

保育・教育現場の連携に対する意見や提案などの調査結果から、保育士や幼稚園教諭・小学校教諭たちが連携の重要性を痛感し、熱望していることが伝わってきた。

然しながら保育・教育環境の現実、公立と私立の経営上の配慮からくるジレンマや、昨今の少子化・核家族化により助長されすぎた個性尊重と権利や自己主張、モンスターペアレンツの出現など難しい問題が山積している。複雑でテンポの速い情報の溢れる時代に振り回される若い親たち、外国籍や一人親家庭の増加、虐待などの問題を抱える親たちへの子育て支援といった、昔では想像もつかないほど複雑化した保護者との対応に時間を奪われてしまう状態である。

個人情報保護法といった制度の壁が立ちはだかり、経済的施策からくる保育・教育現場の人手不足といった時代の流れの渦に浮沈している現実もある。

大人はもっと真剣に、この「現実」を見つめ、考え直さねば、子どもの「明るい未来」は見えないと考える。

### (2) 今回のアンケートの回答者について

子どもの成長・発達過程においての育ちの不具合さが問題になる昨今だが、まず大切なこととして、子どもの成長・発達過程を把握しておくことが重要である。しかしそれには、今回の調査に対する回答者（小学校教諭・幼稚園教諭・保育士）にも注目する必要がある。性別・勤務年数・ポストの違いに大きな特色があり、子どもの成長・発達過程に対する理解や把握の仕方にも影響がみられる。今回の幼稚園・保育所側からの回答は、若い女性保育者が大半を占めているがために、小学校の教諭よりも人生経験が浅く「子ども」を見るスパンが短い事からくる傾向もあったように伺える。

このような専門性・文化の違いが回答結果にも反映されていることが伺える。小学校の教諭は、専門教科のある中学校教諭とセットで資格をとることが多い。小学校の教諭で幼稚園教諭資格を持つ人はまだまだ少なく、保育士資格を持つ人はさらに少ない。従って、なかには専門教科には強いが、移行期の子どもについては、子どもを担当してから学ぶということもあるのではないか。幼稚園・保育所の5歳児の様子を把握できていないので、1年生を赤ちゃん扱いしてしまったり、あるいは入学当初から小学生扱いで“言葉だけの指示”を出してしまったりと、入学当初の子どもの気持ちに添った指導が不得手な小学校教諭もあるようだ。また僅かではあるが、幼稚園・保育所時代は単なる“小学校への前段階”であるとか、連携は入学後のクラス編成が関心事であるような風潮もあった。

このような専門性・文化の違いは、幼稚園と保育所も同様であることが伺える。文部科学省と厚生労働省の壁もあるのではないか。幼稚園は学校教育法で義務教育をみすえているのに対し、保育所は児童福祉法で子どもと保護者の安定した関係や生活を大切にしている事から、各々の特色が出てくる。しかし、極端なところでは、幼稚園側の回答から“保育時間内の子ども”に関してのみと、“小学校でスムーズに行動がとれる練習段階”のような意識が伺えた。保育所側からは“保育時間の長いこと”と、“親と共に子育て”をしている気持ちが感じられたが、生活面で終始しているような面もあった。

公立の小学校は男性教諭が女性教諭よりも数としては少ないものの相当数なり、年齢層としても各年代



が揃っている。公立の幼稚園や保育所は概して年配の女性が多く、私立の幼稚園・保育所は、若い女性が大半を占めている。管理職の割合も同様である。このようなアンバランスは、待遇面や生活の保障・募集人員数などといった社会の構成や時代背景が、今回の数字として表われている。

今後、保育・教育職を志す有能な若い学生たちが、安心して希望に向かって進める世の中になって欲しいと願う。特に、乳幼児期と言うのは“人間として生きる根っこ”を育む大切な時期であることを、社会はもっと広く認識して欲しい。幼児期は「知育」や「お受験準備」とか、「ファッション」など商業主義的な風潮に流されて終わってはいけない、“人間”の子どもとして、大切な時期をいかに育てるか、社会全体で再考されることが望まれる。

### (3) 調査内での合意性

「保育・教育現場の連携に対する意見や提案」と、調査内容の1つめの「幼・保・小の連携の実態と意識調査」からは、現在の保育・教育現場の生の声が具体的に伝わってきた。連携の必要性を感じてこの研究と調査を始めたのであるが、連携の重要性をさらに再確認させられる結果であった。

調査内容の2つめの「幼・保・小の立場から、幼児期に重要と思われる体験の調査」では合計15の質問をした。小学校、幼稚園、保育所の立場で、幼児期に何を重要な体験としたか、その結果に順位をつけた。まず、幼児期に重要と思われる体験としての1番目は、小学校、幼稚園、保育所の何れもが『健康の領域』の「外で元気に遊ぶことができ、丈夫な体を作る」で一致した。しかし、2番目は小学校が『健康の領域』の「挨拶・早寝早起きなど、生活リズムの確立」を、幼稚園は『言葉の領域』の「担任や友達の話をしっかり聞くことができる」を、保育所は『人間関係の領域』の「相手の事を思いやることができ、友達と仲良く遊ぶことができる」であった。3番目は小学校が『人間関係の領域』の「相手の事を思いやることができ、友達と仲良く遊ぶことができる」であった。幼稚園、保育所の3番目は『健康の領域』の「挨拶・早寝早起きなど、生活リズムの確立」であった。幼児期に重要と思われる体験の2番目と3番目で、小学校、幼稚園、保育所の特色が、みられた。

また、15問のうち3問が小学校、幼稚園、保育所において順位がすべて同じであった。まず、1番重要な体験として『健康の領域』の「外で元気に遊ぶことができ、丈夫な体を作る」が一致した。次に一致したのが5番目に重要な体験として『人間関係の領域』の「集団のルールを守ることができて、協調的な態度がとれる」であった。3つ目の一致は15問中の15番目に重要という結果の『環境の領域』の「自分の名前や数字を書いたり計算したりすることができる」であった。この質問は勉強の先取りと捉えられた可能性もあるが、何れにしてもこれら15問の結果から、小学校、幼稚園、保育所が重要とする事への思いは同じであることが伺える。

この「連携」の研究で、小学校、幼稚園、保育所はそれぞれの特色はあるものの、連携以前の基本的なところでは、保育・教育現場における心は何れもがしっかりと繋がっている事が明確に伝わってきた。

## 6. おわりに

より良い子どもの連続的な学び・育ちを援助するにはどうしたらよいのかと、現在の保育・教育環境を調査し、これからの時代を担う子どもとその親たちへ、何らかの援助の提案ができればと考察を試みた。

結果としては、保育・教育環境の現実が非常に厳しいものであることと、連携の必要性の再確認であった。

「デューイがフレーベルの教育原理を再現したシカゴ大学の実験校をはじめ、アメリカの小学校の教育内容や方法は、幼稚園教育からの自然的な連続発展であって、幼稚園は小学校の初級ないし基底として、小学校教育に密接に関連するようになっている。幼稚園と小学校低学年とは『幼年教育』として分離できない内面的な一連と考えられている」と、「フレーベル『人間教育』入門」に記されている。国家や時代、あるいは教育システムの異なりが有るといえども、「人間の教育」の本質的なところは同じはずである。

幼稚園、保育所、小学校の連携を、大切にして欲しい。

今回の調査に対して、限られた時間と多くの問題を抱える教育現場から、連携に対する具体的な意見や提案が多数寄せられた。現実的な連携のシステム化や、保護者対策といった教師間の垣根を越えた連携の工夫、「皆で子育てを！」の気持ちを繋げる篤い提案があった。未来を見据えたこれからの保育・教育環境に、期待したい。

お忙しい中、ご協力いただいた保育士・教諭の方々にたいして感謝いたします。

この考察結果をお届けし、さらなる問題提起や参考としていただける部分があれば幸いです。

## 参考文献

- [1] 文部科学省『新学習指導要領』2008年
- [2] 『新しい国語』東京書籍、2005年
- [3] 『幼稚園教育要領』〈平成20年告示〉フレーベル館、2009年
- [4] 『保育所保育指針』〈平成20年告示〉フレーベル館、2009年
- [5] 厚生労働省『幼稚園教育要領』〈平成20年告示〉フレーベル館、2010年
- [6] 後藤永子『保育者として生きる―保育指導論―』スペース社新保育研究室、2005年
- [7] 荘司雅子「教育学古典解説業書3 フレーベル『人間教育』入門」明治図書出版、1975年
- [8] ミネルヴァ書房編集部 保育所保育指針 幼稚園教育要領 解説とポイント ミネルヴァ書房、2008年
- [9] 小田 豊・芦田 宏『新保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る：保育内容「言葉」』北大路書房、2009年

受理日 平成22年9月30日

